

日常のほとんどは伏線にならない

けどバス停の少女の水色の裾が 網膜の前をはなれ

なくて 困る

わたしは林檎

特有の直線にべったりと凭れ

かかって 温度をさぐってばかり
いる

お別れの日には少女の裾が何度も何度も翻って、翻るだけで、睫毛は上下して、
そんなうちにお別れは通り過ぎて、完全な温度で執り行われて、済んだこと
の美しさだけが残って、しまっ
ている

先生の脚捌き

とつかの振り子運動が重なってわたし

の回線を乱し てばかりいる

みたい

眠いねと呟いた君の瞳は今まで一番カフエインの色

仮初の町に真の君が眠ってる

本当の町に僕の嘘は眠りたくて

眠って

ほんとうと繰り返す君の唇だけがみにくい 呼吸ばかりしている